

住宅改修の成果を引き出すために ケアマネジャーの職能で課題を解く

要介護状態になっても、愛着のある自宅で、自分の望む生活を送るための方法、住宅改修。一方、ケアマネジャーの住宅改修への対応は、専門領域でない部分が多く、課題もあるようだ。そこで、臨床の現場で活躍し、さらに研究者として住宅改修におけるケアマネジャーと建築関連職種の連携に関する調査研究等をしている関西医療大学の山田隆人氏が、ケアマネジャーが知つておきたい知識や多職種連携の方法をまとめた。現状の課題整理と解決策の検討に活用したい。

1. 住宅改修における課題

住宅改修を行うことで、生活機能が向上し、生活範囲が広がるという報告があります。一方で、期待された成果が得られなかった改修も少なくありません。成果が得られなかった要因として、次の4つの課題が挙げられています。

1) 改修対象・内容の課題

- ・アセスメント不足・動作観察の不十分さ

利用者の身体機能、生活動線、住環境について細やかなアセスメントがなされずに改修を進めてしまう事例があります。実際の動作確認をせず、申請書類のみで改修を決めてしまうケースも報告されています。

- ・専門職（OT/PT）との連携不足

ケアマネジャーと施工業者のみで改修を決め、「動作評価を伴わずに手すりを設置した結果、位置が合わず使われない」という課題が発生しています。

2) 施工・業者・支援体制の課題

- ・業者選定の課題

施工を担当する業者の経験や知識が必ずしも十分とは言えず、「知り合いの業者に依頼」「住宅改修経験の少ない業者に依頼」

という事例で、課題のある改修となってしまったケースがあります。

・住宅改修後のフォローアップの課題

ケアマネジャー等が改修後のフォローアップ（使い方指導、新たなニーズの発見、施工結果の確認）を行っている例は少なく、改修後にケアマネジャーが訪問して改修箇所を確認したという報告が少ないという現状があります。

3) 制度設計・運用上の制約

- ・改修目的・内容の共有不足

利用者・家族との間で「何のための改修か」「どのように生活が変わるか」という説明・合意形成が不十分な事例があります。施工業者とのコミュニケーション不足により、意図しない改修内容で工事が進んでしまうケースもあります。

・制度理解・運用知識の不足

支援者側が住宅改修の対象範囲、給付基準、工事の妥当性について理解があいまいなことも少なくありません。「できる／できない工事」の判断に苦慮し、誤った説明や不要な迂回が生じる事例があります。

4) 住宅改修のニーズの課題

- ・利用者のニーズ把握・動機づけの不足



執筆 ▶

山田 隆人

関西医療大学 保健医療学部 作業療法学科 准教授
専門作業療法（福祉用具）、作業療法士、2級建築士、福祉用具プランナー、福祉住環境コーディネーター2級、介護支援専門員